

昭和十二年（一九三七）
絹本着色
各一五七・五×五四・二

白居易の詩「琴詩酒の友皆我を抛つ 雪月花の時に最も君を憶ふ」琴や詩や酒の友はみな私を見捨てて散り散りになった。

雪月花の折になることに、特に君のことを憶い出すより、四季の美しい日本において、冬の雪、秋の月、春の花をその自然美の代表的なものとして、日本では古くから画題に取り上げてきた。その主題に対し、上村松園（一八七五―一九四九）は、『枕草子』『源氏物語』『伊勢物語』を典拠として優雅な三幅対を描き上げた。古典的題材ながら、松園が得意とした王朝美人を主として、流麗な筆線、それが生み出すしなやかな人物の動き、明快で優美な色彩によって、清新な作品に仕上げている。装束の色調が中間色を主体にまとめられているのが特徴的で、特に松園が得意とした薄紫色は各幅に用いられ、多色との調和を考慮してその色調に変化をつけ、気品をより高めた作品に仕上げている。古典を題材にしながら創造的な図様と色彩感覚で、新たな古典創出に成功している。

松園は、明治から昭和期にかけて活躍した京都の女流画家で

あり、昭和二十三年には女性として初の文化勲章を受章した。京都府画学校で鈴木松年に、後に幸野樸嶺、竹内栖鳳に師事し、漢学や詩も学んだ。明治二十年代より博覧会や展覧会等に出品をしているが、初めは歴史や風俗に取材した作品が多く、次第に市中町方の女性の日常や、謡曲や王朝文学に題材を求めた美人画を描き、格調高い名作を残している。

本作品は、大正五年（一九一六）十一月、第十回文展に貞皇皇后が行啓の折、出品の《月蝕の月》（二曲一双）を嘆賞され、さらに川合玉堂や竹内栖鳳らと共に、御前揮毫を行った。そしてその数日後、さらに揮毫献上の御命を受けて制作されたのが、二十一年後に完成した本作である。この間にも、大正七年第十二回文展の《焰》、昭和十一年文展招待展の《序の舞》など、数々の大作を発表しているが、本作の構想がようやく成って制作に取り掛かった松園は、他の仕事を一切断り、毎朝、アトリエの空気を新たに入れ換え、身を清めてから制作に臨む程に渾身で取り組んだという。





- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan